式辞

　令和２年度の修了式となりました。振り返ってみると、コロナ禍のため、学校にとっては大きく影響を受けた１年でしたね。

　令和２年度の幕開けは、令和元年度末から続く、全国一斉休校中でのスタートとなりました。入学式と始業式だけは、何とか実施して、その後はまた休校が続きました。新しい先生や新しいクラスの友達との交流は、お預けとなってしまいました。担任となった先生たちは、みなさんのお宅に電話をかけたり、家庭訪問をしたりなどということを通して、みなさんとのつながりを保とうと、努力してくれました。勉強面も心配されました。新しい教科書はもらったものの、全く始まらない授業。少しでも学習を進めるために、課題プリントを作って、皆さんに取り組んでもらいました。まずはできることをやっていこうと、生徒の皆さんも先生たちも必死であったと思います。

でもやっぱり、毎日登校して、みんなで勉強したり、運動したり、遊んだりする、本来の学校生活には、到底かなうものではありませんでしたね。

　そしてやっと６月から、全く今まで通りとはいかないものの、全員が登校しての学校生活がスタートしました。正直うれしかったですね。もちろん、数々の制限や我慢はありました。１年生の校外学習の中止や、２年生は楽しみにしていた、野外学習が延期の末、日帰り行事に置き換わりました。３年生の修学旅行もそうでした。体育大会は半日に、合唱コンクールは中止、大きな行事だけではなく、日々の生活も、衛生管理の大変さ、大勢での集会行事の制限、考えてみると、我慢の一年でした。みなさん　よく頑張りましたね。

　しかし令和２年度の１年は、二度と戻ってこない貴重な時間であることは、令和元年度とも、４月から始まる令和３年度とも、何ら違いはありませんね。

　私たちが過ごしてきたこの１年。我慢ばかりだった、つらかった、だけの１年にしてしまって　よいのでしょうか？　　決してそんなはずはありませんね。

　ものは考えようだ、という言葉もあります。我々はこのコロナの１年だからこそ、学ぶことができた、成長することができた、気づくことができたということが　あるはずです。

　コロナ前までは、学校なんてあって　あたり前　毎日授業があって当たり前、なんなら授業なんかなくなればいいのに。友達なんて毎日あえて当たり前。一緒に遊んだり、お話したりすること自体、まったく当たり前の事でした。

　それが一切なくなりました。こんなことは、我々大人も、まったく初めての経験です。

毎日仕事に行けてあたりまえ、お仕事があって収入を得られて当たり前、

　そんな常識が通用しない時代が、招いたわけではないけれども、急に訪れてしまいました。
　そこで、大人も子供も気が付きました。今まで、当たり前と思っていたことは、もしくは、当たり前すぎて何も考えることなく、過ごしてきた毎日毎日の事柄は、実は　当たり前どころか、有難いことなのだと、気づかされました。
「有り難いこと」は「あるのが難しいこと」と書きます。毎日学校があること、勉強できること、友達とお話できること。すべて「有り難い」ことだと、気づいた私たちは、それを知る前の自分よりも、心の成長を遂げたのではないでしょうか。
　変な言い方ですが、コロナのおかげで、成長できた。と言えなくもないです。

　頑張った１年、耐えてきた１年、このばねの反動を力に変えて、４月からの新学年で、思いっきりジャンプしてほしいと思います。まだまだコロナの影響は続くと思います。だからといって縮こまってばかりは、いられません。感染防止対策を徹底するという、防御手段を講じながら、明るく、活気あふれる来年度の日進東中学校を、皆さん方と、先生方と、そして４月７日に入学してくる新１年生とともに　作り上げてほしいと思います。
期待していますね。

　以上で修了式の式辞とします。